

## 中里の

# 慶昌院の幽霊

けい しょう

平成七年七月五日号

中里一丁目に慶昌院というお寺があります。このお寺は、弘仁十年（八百十九年）に弘法大師が建て、当時は天念寺と呼ばれていました。今回は、慶昌院の第三十代住職である磯田英雄さんから、慶昌院に伝わる幽霊のお話を伺いました。

江戸時代初めのころ、各地をめぐるいた駿府の存鯨和尚は、荒れ果てていた天念寺を見て、その理由を村人に尋ねました。

村人は、「この寺には幽霊が出るので、だれ

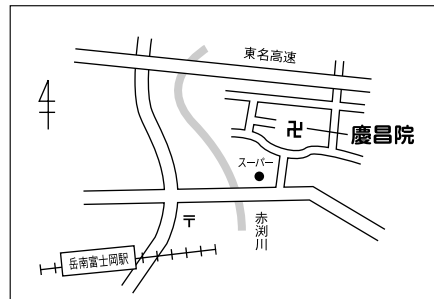
も寄りつきません。

どうか幽霊を退治してください」と言いました。

その晩、和尚はお堂で座禅を組んで、幽霊が出るのを待ちました。すると、草木も眠る丑三つどき（真夜中）、怪しい影が和尚に近づきました。

「わしは、存鯨という坊主だが、そこにいるのはだれか」と静かに尋ねました。怪しい影は、「あなたは、迷えるものを救い、成仏できるように導いてくださるか」と言いました。和尚は、「しかり」と答えました。

鬼の姿をした怪しい影は、たちまち人の姿になって言いました。「私は、源頼朝公の家来



で、成田三郎慶昌けいしやうという者です。私の兄の曾我兄弟は、親のかたきを討ったのですが、殺されました。私も首をはねられるに違いない



▶ 成田三郎慶昌の墓。「空忍院殿天念慶昌居士」と刻んであります

と思い、切腹したのです。死骸しがいは松の根元に埋められ、祭られました。が、戦国の世に寺は荒れてしまいました。どうぞ、私が成仏できるように寺を再興してください」

和尚が寺の再建を約束すると、成田三郎慶昌の姿は消えました。村人は、改めて丁寧ていねいに葬り、供養したということです。

#### 磯田英雄さん（中里一丁目）

存鯨和尚（慶昌院初代住職）は幽霊に対し、大きな声で一喝して「悟り」を開かせたとも言われています。

幽霊とは、人々の迷いの象徴。「悟り」とは、迷いを吹っ切ること。そして、仏は、迷っているものに「悟り」を開かせてくれます。

だから、存鯨和尚は、幽霊としてあらわれた成田三郎慶昌の迷いを吹き飛ばすため、大きな声で一喝したのかもしれないね。